石巻市

文化財だより（第９号）

昭和53年度文化財調査特集

もくじ

平形山根貝塚発掘調査報告……1
木村敏郎
53年度古文書分布調査報告……5
石垣宏
水沼東沢地区民俗資料・民具収集調査報告…10
鈴木東行
鋳銭場資料『金局公用誌』について……21
石垣宏

平形山根貝塚発掘調査報告

石巻市文化財保護委員　木村敏郎
石垣　宏

はじめに

本遺跡は、昭和49年に石巻市教育委員会が実施した遺跡範囲の確認調査によりその概要が明らかにされたもので、それによれば、約3万平方メートルの広さに3つの地点貝塚を含む広範な規模をもつ遺跡であり、須恵器の散布が見られる事から歴史時代のものであろうという推定が成されていた。

また、その所在小字名から平形山根貝塚として名称されたものである。

その後、市教委の手により遺跡を表示する標柱等が設置され、その存在が周知されるに至ったのであるが、昭和53年冬に、遺跡の地権者である佐藤正男氏から農業経営の必要上、ビニールハウスを建設したい旨申し出があり、関係者の間で種々協議の結果、建設予定地点の予備調査を行ない、その状況を確認した上で必要があれば本調査を実施することとなったのである。

ここに報告するのは、後者の本調査時の概要である。

調査団の編成

実施主体　石巻市教育委員会
調査員　石巻市文化財保護委員　木村　敏郎
佐藤　雄一
鈴木　東行
調査補助員　石巻高等学校学生有志
石巻工業高校人文科学部
調査協力者　石巻市文化財保護委員会
石巻市職員　中村　光一

調査期間

予備調査　昭和53年12月9日～10日
本調査　昭和54年1月12日～1月16日

遺跡の所在及び調査地点と考古学的環境

本遺跡は牧山丘陵から東に連なる標高約二百メートルの垂水丘陵東麓にあり、標高約5メートルから20メートルの東向きの緩傾斜地に形成されている。

一帯は日照の良い畑地で所々に民家が点在し、傾斜面の高位部は大部分が雑木林として利用されている。

その位置は国鉄石巻線稲井駅の東南方2.8キロメートルの地点であり比較的自然環境に恵まれた場所である。

ために周辺部には多くの保存状態の良好な遺跡が確認されており、本遺跡と水田面を隔てた東百メートルには平形貝塚また北東五百メートルには磯田貝塚があり、現在消滅したが北西約五百メートルの同一傾斜地に広見山貝塚などが確認されている。

これらは、いずれも9世紀ころと推定されているが、その他中世の造営と思われる牛ノ鞍館が南東方向八百メートルの地点にある。

また、本遺跡内の平形山根25佐藤隆氏宅地内には室町期のものを含む3基の板碑が見受けられ、古代からの人文の形跡が広く認められる地域なのである。

なお、本遺跡が毛利・遠藤の表示した平潟貝塚（S26・6・15陸前沼津貝塚骨角器図録解説参照）に相当するものか否かは不明である。

調査の方法

発掘は、平形山根17の東傾する畑地に貝層部分を調査するため2×6メートルの第1トレンチ、その西側上段の畑地に2×5メートルの第2トレンチを設定して調査を開始した。

第1トレンチは先に予備調査を実施した際の同一地点を一部拡張して設定したものであり、第2トレンチは、今回新たに設定したものである。

その結果第2トレンチは、発掘開始後耕作土下面に自然転石と推定される多数の角礫が検出され、遺構及び包含層等は存在し得ないと認められたので、清掃、写真撮影後調査を打ち切った。

第1トレンチの状況と出土遺物

本トレンチは標高14メートルの地点に設置した東西方向に長い発掘区で層序は上から耕作土、混土貝層、角礫、黄褐色地山土の順序であった。

貝層は殻長4～5センチ程の成育の良いアサリを主体に構成される混土貝層の様態をもち、他に約一割程度の比率でハマグリを含んでいるが、殻の発達はアサリ同様良好なものが多い。

その外、若子数個体であるが、アカニシ、オキシジミ、カガミガイ、マガキ、ホタテが認められ、砂泥底に生棲する貝種が圧倒的に多い。

層厚はトレンチ東部の標高約14・5メートル地点で最厚となり平均約20センチの堆積を見る。

本貝層は全体に西から東に、約4度のゆるい傾斜を見せ、更に南から、トレンチに北接する小谷部に向って、約2度の傾斜で層厚を増す様態を示していた。

特に本貝層は、土器等の人工遺物を全く含まず、発掘中に若干の獣骨及び魚骨を検出したに過ぎない。

確認した個体は、イノシシ、シカ、キツネであるが数量的に少ないため、その比率は検討できなかった。

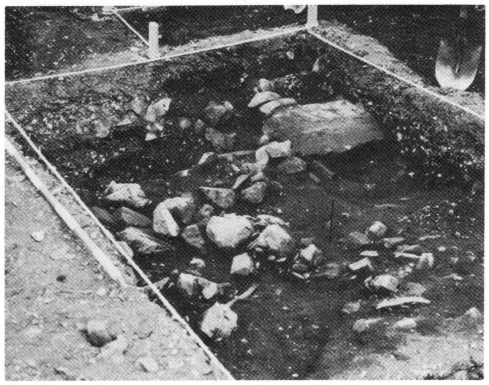
また魚骨は、マグロ及び魚種不明小形魚のセキツイ骨が数片認められている。

なお、貝堆積の所々に、貝層の落ち込み面が確認されたが、一定のプランを持たず、かつ全体の配列にも企画性がない事から、遺構とは認められなかった。

おそらく、下層の角礫の抜き取り穴に投棄された結果、かような様態を呈しているものと推察される。

貝層の下面は数センチから数十センチ程の大小の角礫群が密集しており、これらは第2トレンチで検出されたものと同様、斜面上部から短期に流失堆積したと思われる転石である。

念のため、トレンチの西半部を角礫除去後地山面の精査を行ったが遺構と見るべき人為痕跡は全く認められなかったため、トレンチの実測、写真撮影を実施後作業の一切を終了した。



▶第1トレンチ内転礫群の状況

◀第2トレンチ調査の状況

考　察

今回の調査では、年代決定の材料となる人工遺物が全く認められなかったためその年代を確定することはできない。

しかし、貝層の様態からして、少なくとも、平安時代までさか上るものではないと考えられる。

その理由は、近接地に存在する磯田、平形の両貝塚は貝層中に土師器（表杉ノ入式）を含む平安前期のものであるが、貝組成を比較した場合、本貝塚が圧倒的にアサリの数量が多いのに比べ、二者はハマグリの比率が非常に高いためである。

この事は、古平形湾時代の双方の海浜条件を同様と仮定した場合、本地点の貝層は磯田、平形と同時期に形成されたものではない事を示唆すると考えられる。

従ってその上限年代は磯田、平形より新らしく、中世をさか上るものではない。

一方、貝層中に耕土下面から掘り込まれたピット状の攪乱部分からは、幕末ないしは明治と推定される陶器及び磁器片が出土しているので、本地点貝塚の年代は中～近世の巾が考えられる。

この場合、中世以後、現在の稲井平野部に海水が流入し、湾入地形を取っていた形跡は全くないから、今回の調査地点に認められる貝は、遺跡の周辺地域で採集されていたものではないであろう。

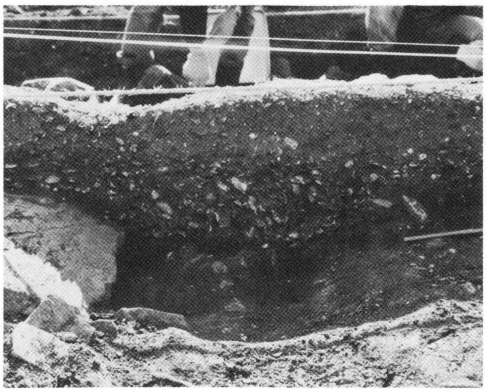
この場合、最も注目されるのが、本遺跡から南に約2.5キロ隔てた、にら塚及び垂水囲貝塚であり、貝層の様態は、人工遺物をほとんど含まず、しかもアサリを主体に構成されている点、非常に共通性が認められる。

◀第1トレンチ獣骨出土状況（貝層下部）

うち、にら塚は近世に形成された事がほぼ間違いないから、これらとの比較にて考察した場合、平形山根貝塚の調査地点は近成の形成に係る可能性が強いと推定されるのである。

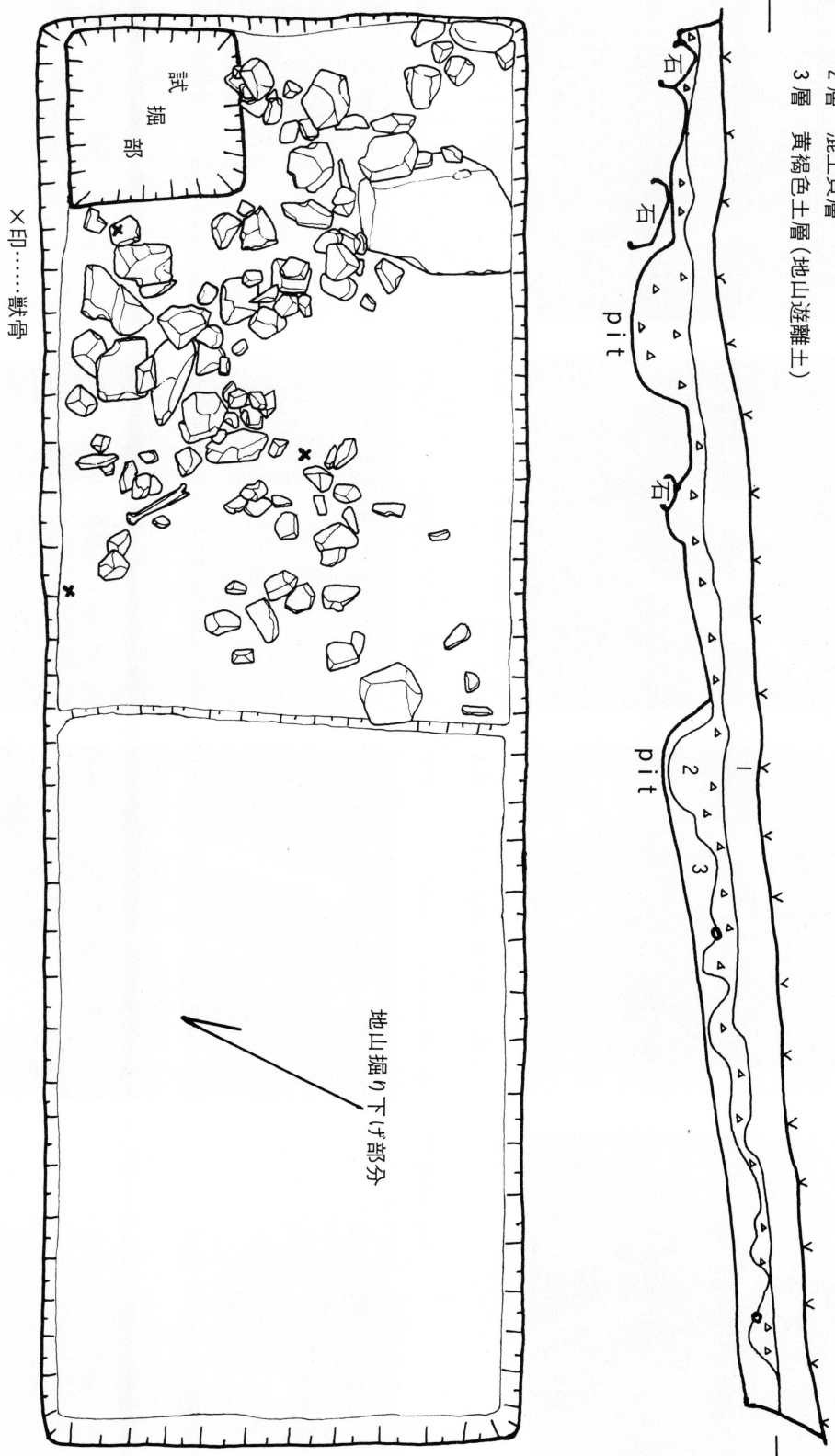
なお、本遺跡の性格等、詳細な点については、今回の調査で把握する事は、時間的な都合上できなかった。

なお、この報告文は木村の了解を得て、中村が執筆したものである。

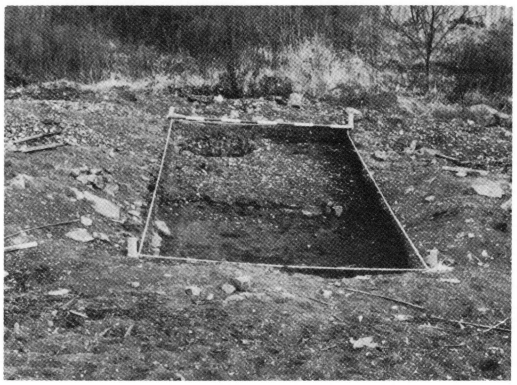


▶第1トレンチ南壁の貝層落ち込みの状況

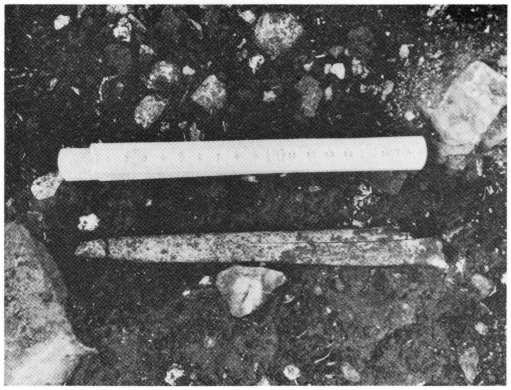
平形山根貝塚第1トレンチ平面図及び南壁実測図



▶調査地近景　左・第1トレンチ　右・第2トレンチ



◀第1トレンチの設定状況



▶第1トレンチ獣骨出土状況（先端に加工あり）

◀第1トレンチ獣骨出土状況（貝層下部）

▶第1トレンチ獣骨出土状況（貝層下部）

◀第1トレンチ北壁貝層の拡大（開口しない殻が見られる）

▶調査参加者

◀第1トレンチ発掘状況

五十三年度古文書分布調査報告

石巻市文化財保護委員　石垣　宏

一、はじめに

昭和五十二年度の調査にひきつづき、本年度も市内の旧家で所蔵されている古文書の分布調査を実施した。市内の旧家よりの情報をもとに、事前に連絡をさしあげ、了解いただき、訪問させていただいて所蔵されている貴重な古文書を閲覧、写真撮影をさせていただいた。

二、調査経過

古文書は各家の奥深く所蔵、保管されておるわけで、いわば各旧家の宝物の一つでもある。そのために事前に各所蔵者に対して通知の上、許可を得て伺い、閲覧させていただくわけである。本年度は所蔵者の情報をもとに次のお宅の古文書を拝見させていただいた。

① 二宮以義氏　市内住吉町
② 松本庄吉氏　市内泉町
③ 松坂清吾氏　市内流留
④ 岩城準之助氏　市内中瀬
⑤ 四倉源一氏　市内中央

本年度はこの外に地区設定として、小竹浜地区の調査計画を立てたが、時間的余裕がなく、次年度へ回すことにした。

前述の五軒のお宅の内、四倉源一氏宅を訪問したところ、尨大な量の古文書が所蔵されておられた。江戸時代の商品の取引き関係文書、借用証文等が多く、今後の分類の方法についてお話しし、四倉氏ご自身整理されるとの意向を尊重し、整理後に再び閲覧させていただくことを約して、実際の調査は次年度以降としたわけである。四倉家は、福島県いわき市を江戸時代に支配した内藤家の子孫であり、内藤家からの家系を作られ、四倉氏自身研究熱心な方で、今後の研究に待つことにしたわけである。所蔵されている古文書の内容から、江戸時代に石巻に土着して米問屋を営み、江戸への登せ荷の帰り荷として、薬種その他の荷物を積んで帰国した様子が伺え、近世における海運や、物資の運送及び近世の商品流通について解明できる貴重な資料と思われた。後日再び四倉氏宅に伺い、整理を手伝いさせていただき目録、写真撮影で把握したいものと思っている。四倉氏も研究熱心で同家に伝わる資料について多大な関心を持っておられて、大切に保存されておられるので安心した次第である。

三、調査内容

調査によって確認できたのは、後述の目録の文書であった。

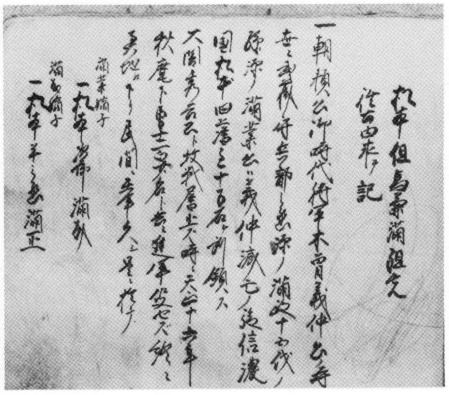
① 松本家文書　二十一点
② 二宮家文書　四十九点
③ 松坂家文書　四点
④ 岩城屋文書　一点

四、調査物件に対する所見

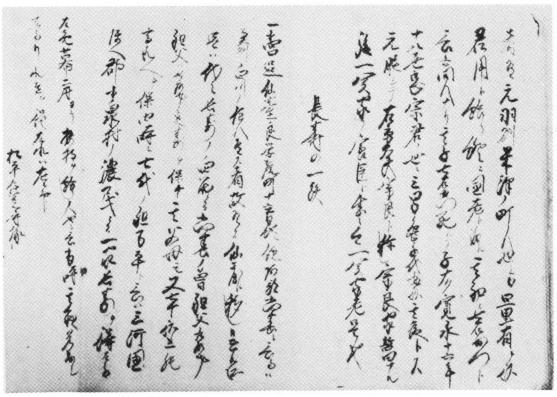
①松本家文書

松本家は、祖先は永巌寺の開基である。「石巻市史」によると、松本家の祖は、源満業で信州松本の城主で五千石を領したとある。豊臣秀吉の全国平定の際、戦意を捨てて伊勢にのがれ、満業の子満正・満高の時代に一族をひきつれて石巻にのがれ鹿妻に住んだ。その後満高の子、松本但馬兼満は、寛永十一年住居を石巻仲町に移し、仲町北部一帯を開発し、その名は、「松本横丁」(今はない)として残ったという。この仲町移転の際に祖先の遺骨を八ツ沢(現石巻小学校背後地)松本山に改葬して、そこに一庵を結び菩提庵と称した。寛永十九年仙台輪王寺の僧角外恕鱗和尚を請じて開山し、四代賢碩和尚の代に現在の場所に堂宇を新築し、菩提山永巌寺と改称したとなっている。

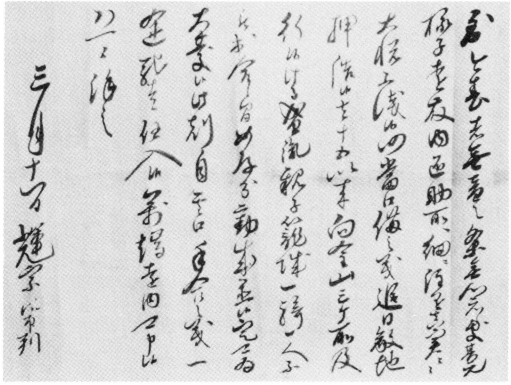
松本家文書の中には、葛西氏家系、伊達氏家系、永巌寺縁起や、中世の文書として貴重な、伊達輝宗書状、武田信玄書状があり、特に輝宗や信玄の書状は真筆であり、大切に保存して居られた。松本家の祖先は、石巻草分けの由緒ある家柄であり、松本山に残る墓碑等からもさらに詳細に松本家について調べたいものと思った次第である。



▶松本家文書　松本家家譜（部分）



◀松本家文書　鈴木和泉家系（部分）



▶松本家文書　伊達輝宗書状（年代不明）

◀松本家文書　武田信玄書状（永禄年間）

② 二宮家文書

二宮家については、現当主以義氏（住吉町在住・外科医）が、「二宮家系譜」（昭和五十一年七月）をまとめられておられる。その「系譜」の中から二宮家について紹介したい。

「二宮家は平姓である。平安朝の桓武天皇の第三王子一品式部卿葛原親王よりの流れを汲む桓武平氏の末裔である。

家紋は、男、角切りの大、女、揚羽の蝶で平家の紋と一致する。

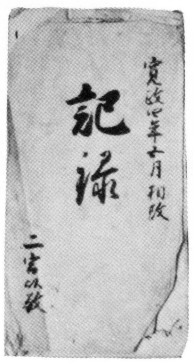
葛原親王より三十余世、約六百年を経て二宮家の遠い先祖は阪東に在住していた。その間源家及び北條家による鎌倉幕府時代は、平家の流れを汲んだ関係上、阪東の僻地に隠棲していた。室町戦国時代に武州多摩郡二宮の邑（現在の神奈川県）に住み郷士として生計を立てていた。慶長十九年奥羽の雄伊達政宗が大坂冬の陣に徳川方として出陣し、偶々多摩郡通過の折当時陰陽師であった二宮一洞はその子三名と共に隊列に加わり、大坂の役に於いて奮戦し豊臣方の武士二名の首級を上げ、政宗より賞讃され、そのまま家臣となって仙台に凱旋、ここに伊達の世臣としての身分が決定する。一洞は間もなく逝去し、三人の男の子が残された。長男は掃部、次男は平兵衛朝次、三男は豊後という。次男朝次は手樽銭神に采地を戴く、これが松島二宮の始祖である。」

同「系譜」によると、長男掃部は、政宗の長男秀宗に従って伊予宇和島に赴き三男豊後は、仙台城下に住し、重朝の代に仙台外記丁に屋敷を構え四百石を拝領、栗原郡川熊村が采地であった。その後の功績、知行については「伊達世臣家譜」平士の部と、「仙台藩家臣録」に載せられている。

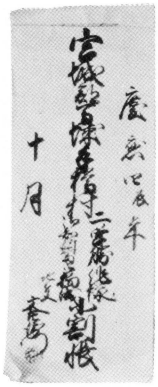
次男朝次の系譜から来る現二宮家の家系を同「系譜」より紹介したい。

二宮一洞――①平兵衛朝次――②満吉――③六郎左右衛門――④七之助清次――⑤逸平友次――⑥又三郎好義――⑦儀左右衛門以義――⑧岩之助以敬――⑨又三郎以佑――⑩以重勝作――⑪理三郎以次――⑫辰三郎以忠――⑬以孝――⑭以義（現当主）

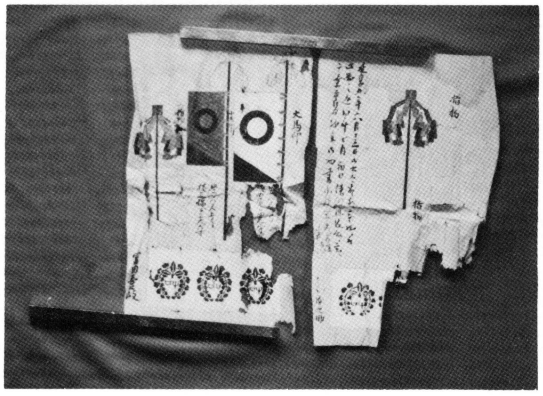
二宮家所蔵文書の内、黒印状と知行割目録が大部分を占めている。黒印状、知行割目録によると、二代満吉の代に本地として宮城郡山王村に壱貫百五拾五文拝領し、慶安元年に加増されて、磯崎村に四貫文余、手樽村に五貫文余で合計拾貫文（百石）を与えられている。さらに四代七之助の宝永元年に黒川郡宮床村に壱貫文余加増、六代又三郎の代明和八年に黒川郡大衡村に壱貫六百文余と東磐井郡西口村、母躰村に三貫文加増されて、合計拾三貫文（百三十石）となって幕末に及んでいる。さらに文政八年仙台藩に提出した書状によると、八代以敬より九代以佑に跡目相続した際の内容では、「御番所中之間、知行高拾三貫文、無役、屋敷北五番丁新坂通、在郷屋敷宮城郡高城手樽ニ所持仕候、従御城上道八里余」と記されている。明治維新とその後の変革により手樽をはなれ、十二代以忠氏が医師と



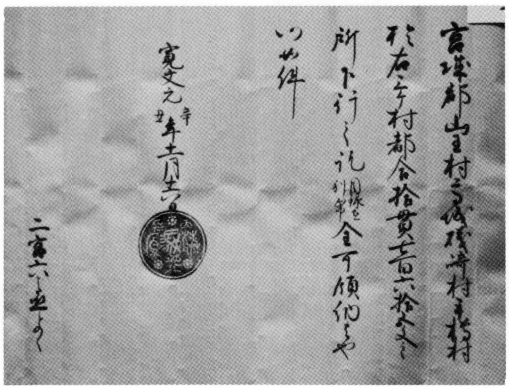
◀二宮家文書　書留帳（寛政4　1792）



◀二宮家文書　年貢小割帳（慶応4　1868）



◀二宮家文書　指物・旗印



◀二宮家文書　黒印状（寛文Ⅰ　Ⅰ66Ⅰ）

◀二宮家文書　知行目録（寛文Ⅰ　Ⅰ66Ⅰ）

なり牡鹿病院長として、自宅も明治三十五年住吉公園に建てている。

古文書の内容を見ると特に石巻との関係についてのものはないが、その中で貴重なのは、知行宛行に関して黒印状と知行目録が完全に年代が一致して残されていることであり、寛永期から天保期まで全部揃っていることである。仙台藩士の知行給与の形態が明確に把握できよう。二宮氏のご理解や研究熱心である点からも大切に保存されていくものと期待される。石巻に残る数少ない家臣の知行給与資料として貴重なものといえよう。

③　松坂家文書

松坂家は、文政・天保・弘化の頃に流留村に住んでいた俳人松川忠作（号を万雪と称す）の子孫である（稲井町史）とされ、この家に松尾芭蕉の真蹟と箱書に記した文書が残され大切に保存されている。芭蕉真蹟かどうか判明できないが、しかもどのような形でこの家で入手されたかわからないが、おそらく俳人の万雪が入手し保存していたものでないかと思われる。この文書の末尾は、虫喰いのためか不明で判読できる所では、

鳴海知足亭にて

よき家やすずめよろこぶ背戸の□□

はせを

となっている。鳴海知足とは、松尾芭蕉の門人である三河国鳴海に住む大郷知足の家で一句を吟じたことがあるので、そこからつけられたといわれる。この不明の部分について「稲井町史」では、「ふゆ」ではないのかと記している。いづれにしても芭蕉の真蹟であるのかどうか真蹟集と比較し研究してみる必要があると思われる。

また同家には万石浦の絵図があり、その奥書に流留村と渡波村宿との村境争論の一件の文書がつけられ、結着がついたので絵図と共に書き記しておいた旨が記されている。この分折については、文化財保護委員の木村敏郎氏が、石巻市史資料集第二集に「万石浦古絵図」として詳細に述べておられるので省略したい。この松坂家では、芭蕉の真蹟は木箱に入れて大切に保存しておられ、また絵図についても虫喰いもなく保存は良好であった。

④　岩城屋文書（略）

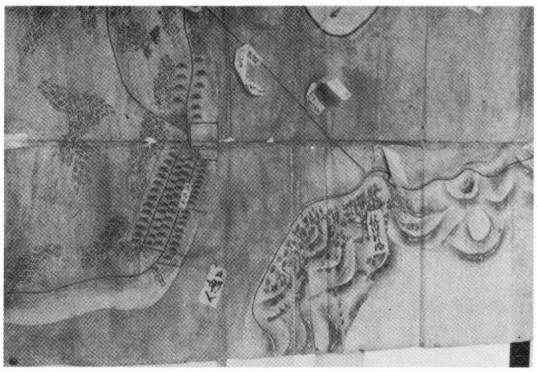
五、保護に関する所見

今年度は、所蔵されている各旧家から情報をいただいたわけであるが、いずれの旧家でも、その家に伝わる大切な資料として保存されていることで、虫喰いもなく管理も万全であったと思われる。しかし、今後の保存を考える時には、これだけでは完全といえず、例えば市図書館でマイクロフィルムに撮影して保存するとかの対策を講じていくことが第一と思われる。さらに言えば、将来とも早い時期に博物館等の収蔵施設が整備されていくことを期待するものである。湿気や虫害からの防除も充分に整った施設設備があれば、現在の所蔵者の方からも管理の委託をおねがいできるものと思われるのであり、現資料が公共機関等にあってこそ資料として役立つものと思われる。

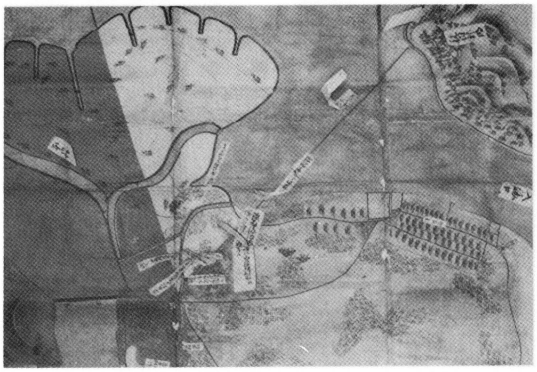
六、今後の調査予定

五十三年度の調査にひきつづき、五十四年度も各所蔵者からの情報をもとに調査し、さらに小竹浜、折ノ浜など東浜地区に残る漁業関係文書の分布調査を実施したいものと思っている。実際にお持ちの方、身近かに所蔵されている方ありましたらぜひお知らせいただきたいと思っています。

現在まで市内の旧家四軒から連絡をいただいており、早急に訪問させていただき、写真撮影などによって記録し、カード・目録の整備を行っていきたいと思っている所である。



▶松坂家文書　絵図（部分）
（宝永4　1707）



◀

▶松坂家文書　絵図奥書（村境争論書状）
（宝永4　1707）

【絵図奥書解読文】

「絵図奥書」

牡鹿郡流留村と同郡渡波宿村境論所在之渡波宿之者共ハ赤筋之通渡波分ニ有之由申出候、流留村之者共者黄筋之通流留村分ニ有之段申出争論ニ付、段々相糺候口書并双方ゟ證據ニ可罷成哉と指出申墨付等取揃、右論所之所絵図ニ仕立、双方之者共見届之判形為仕候上、指添相達、於評定所双方被遂御僉儀候處、流留村ゟ申出候通ニ被相済御決断、御書付坂本平右衛門、但木源左衛門方ゟ別紙之通指越候墨付江絵図指添相渡申候、双方判突之絵図ハ評定所ニ被留置候ニ付、右絵図を以写如斯ニ候以上

宝永四年七月廿五日　木戸源六郎　印

目録

松本家文書（市内羽黒町　松本庄吉氏所蔵）

1、改葬願　明治二十三
2、改葬費見積書写
3、定約証
4、承諾書　明治二十三
5、葛西三良(郎)清重家系
6、鈴木和泉家系
7、松本家家譜
8、永巌寺縁起
9、書状　文化十三（一八一六）
10、書状　大正十四
11、寺籍財産明細帳
12、書状（伊達輝宗より　松本美濃守宛）
13、書状（　同　）
14、書状（　同　）
15、書状（　同　）
16、先祖書上
17、松本家家譜
18、（書留帳）
19、伊達家家系
20、（寺社の覚）
21、書状（武田信玄より　松本次郎宛）

二宮家文書目録（住吉町　二宮以義氏所蔵）

1、二宮氏家譜序　正徳五（一七一五）
2、黒印状　寛永二十一（一六四四）
3、黒印状　慶安一（一六四八）
4、知行目録　慶安一（一六四八）
5、黒印状　寛文一（一六六一）

6、知行目録　寛文一（一六六一）
7、黒印状　天和三（一六八三）
8、黒印状　元禄四（一六九一）
9、黒印状　宝永一（一七〇四）
10、知行目録　宝永一（一七〇四）
11、知行目録　宝永二（一七〇五）
12、黒印状　延享一（一七四四）
13、知行目録　延享一（一七四四）
14、黒印状　宝暦八（一七五八）
15、知行目録　宝暦八（一七五八）
16、黒印状　明和八（一七七一）
17、知行目録　明和八（一七七一）
18、黒印状　寛政四（一七九二）
19、知行目録　寛政四（一七九二）
20、黒印状　文化九（一八一二）
21、知行目録　文化九（一八一二）
22、黒印状　文政三（一八二〇）
23、知行目録　文政三（一八二〇）
24、黒印状　文政十一（一八二八）
25、知行目録　文政十一（一八二八）
26、黒印状　天保十三（一八四二）
27、知行目録　天保十三（一八四二）
28、先祖書上　延宝五（一六七七）
29、書状　元禄四（一六九一）
30、書状　延宝二（一七〇五）
31、相続願届　享保四（一七一九）
32、記録　寛政四（一七九二）
33、書状　文化四（一八〇七）
34、家系書状　文政八（一八二五）
35、年貢小割帳　慶応四（一八六八）
36、高城磯崎村野場御役
37、書状
38、書状（尾張中納言より　仙台中将）
39、書状
40、書状
41、書状
42、書状
43、和歌
44、書状
45、指物・旗印
46、知行割帳
47、書状
48、書状
49、（和歌）

松坂家文書（渡波流留　松坂清吾氏所蔵）

1、芭蕉翁真筆
2、書状（此汐の添状）
3、村境争論書状　宝永四（一七〇七）
4、絵図（万石浦）

岩城屋文書（市内仲瀬　岩城準之介氏所蔵）

1、下荷物諸用留（文政五年）

▲岩城屋文書　諸用留
（文政5　1822）

水沼東沢地区民俗資料・民具収集調査報告

石巻市文化財保護委員　鈴木東行

総観

水沼東沢は旧稲井村の真野川の源流、水沼川に注ぐ沢に沿って発達した部落である。

沢の源は河北町針岡との境の大萱峠と大福地との境から発している。

往時は、大萱峠を越えて針岡方面から炭俵八俵をつけた「ダンコ」（馬で荷を運ぶことを業とする者）が東沢の舟着沢や水沼川の「カシ」に炭荷をおろし、そこから和舟で石巻方面に運搬した。

現在、戸数四九、人口二五八、各家は畑作、米作、タバコ栽培を主として生計を立てている。明治末から大正初めにかけて十数戸が北海道方面に移住したと伝えられている。

部落内には戸主層の集団である三講中（入り・中・亀山の各講）、長男の集団である青年会、老人層の権現講と嫁層の観音講、女性の年寄り層の念仏講があり、さらに昭和初頭まで子供達が旧七月七日の夕方、屋敷神境内に舞台をつくり、七夕をかざり、迎えて宿泊し、次の朝水沼川に送る行事をしていたことから子供組もあったことが知られ、東沢は明確な年序集団のもとに社会の秩序を維持していた。

さらに同族集団を「カメー」（構え）と称し、各カメーはそれぞれの屋敷神を中心に信仰的結合を強め、さらにえびす親、えびす子の擬制的親子の風習がある。

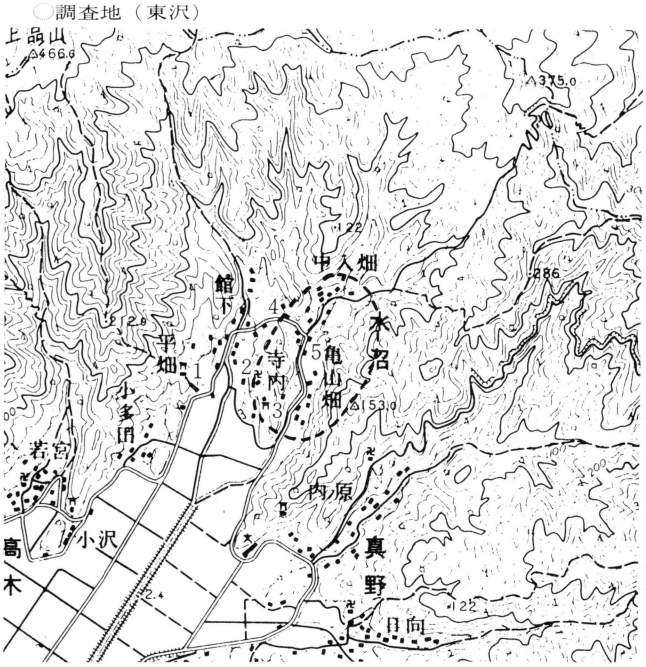
年中行事には、農耕や山に関する儀礼的行事が顕著に見られ、また各カメーの屋敷神には山の神とお稲荷さんを祀っているのが、九カメーのうち四カメーもあり、山の神（祖霊）→田の神→稲荷という日本特有の民間信仰に生活基盤を置く部落であることを窺い知ることができた。

話者　岡東平（明43・3・7生）

注……調査は古老から聞きこみを主とし大正の生活（自然経済に依存した）を対象としている。

▼水沼東沢位置図

1．村氏神…伊去波夜和気命神社
2．龍　泉　院
3．八幡神社
4．安楽寺跡
5．秋葉山（公民館前）
◯調査地（東沢）



◀講中所有の倉
（冠婚葬祭用食器が格納）

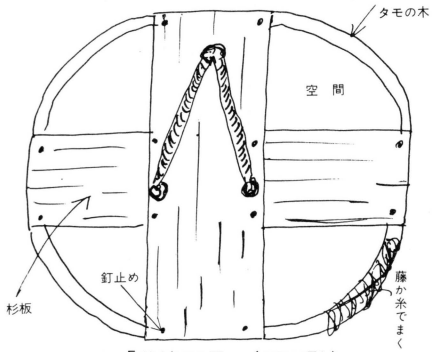
経済生活

(一) 生産暦

（次ページ参照）

(二) 生産

湿田……「ドベ田」と称して、赤もみの陸奥一三二号・フクボウジの品種が用いられ、鍬をうってならしただけで田植えができる状態で腰や胸までつかり、後方にしりぞきながら田植えをする。刈取りには田下駄（「谷津下足」）を使用した。



▲「谷津下足」（田下駄）
（湿田の稲刈り用に）

生　産　暦（新暦）

調査地　水沼字亀山畑　・　調査日　昭和53年7月22日

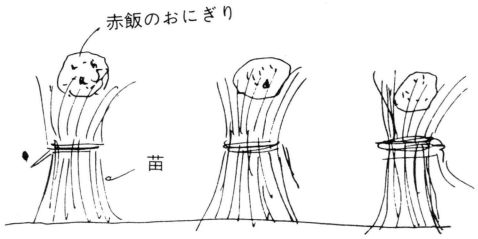
種類／月	米	麦	大豆	養蚕	山仕事	年中行事
1						○臼おこし ○農はだち ○作はだち ○山のきりそめ
2						
3	種つけ					
4	苗代くろ打ち 苗代整地 種まき					○やこめ（種まき終了）
5	本田整地 こぎり しろかき					しろ休み（しろかき終了後）
6	田植え 一番草	刈取り はぜかけ	豆まき	春蚕		○そおり（田植え初めの日） ○さなぶり（田植え終了日）
7	二、三番草	脱穀		まゆかけ終了 売渡し 夏蚕		
8				まゆかけ終了 晩秋蚕		
9	刈取り はぜかけ					
10		種まき				○かっきり（刈取終了日）
11	脱穀		収穫		炭焼	にわばらい（脱穀終了日）
12					薪とり	

話者　岡　竹之助氏（大正2年4月28日生）

注 …… ○の内容は年中行事の項目を参照

田植……苗取りは女性のみ。植手の割合は女性六割、男性四割であり「結い」と称して五・六軒で主として親類や近隣の親しい人々で共同で田植えをした。（稲刈りも結いでやる）

田の神……田植えの始まる日。「ソオリ」と称してお田の神をまつる。赤飯のおにぎりをつくり、苗三把にそれぞれ一つずつのせ、庭にかざり拝む。（このおにぎりを食べると腰が痛くならない）「サナブリ」と称して田植えの終った夕方、餅をついて神・仏にあげて拝み、皆で食べる。



▲オダの神をまつる（田植初め）

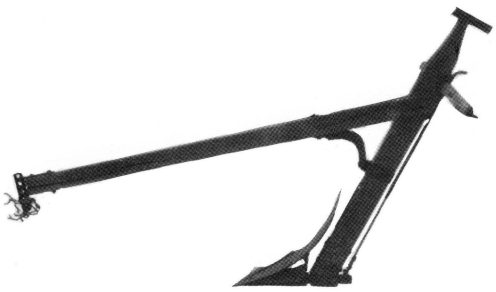
注……サ（ソ）オリは、サ（ソ）とよばれる田の神が降りてくる初田植えの行事、ナナブリはサノボリの転訛で、田の神が田植え終わりを見とどけて天へ帰る日からきたと言われ、田植えの無事終了を感謝する稲作儀礼――『日本民俗資料事典』より

田畑の農具

種類	名称	用途	入手法（産地）
鍬	クワ	田おこし・こぎり・畑なえ	山形の行商 石巻のハギ屋・ハシズメ
鍬	トングワ	土をほりおこす	同右
鍬	三本マンノウ 四本マンノウ	田おこし 畑おこし	同右
鎌	ネ刈りガマ	山の杉の下がり	同右
鎌	野ガケガマ	田のクロの草をかる	同右
鎌	稲刈りガマ	稲刈り用（ノコガマは戦後使用）	同右
畜力すき	スキ	牛や馬にひかせて土を切り進み掘り起こす	不明

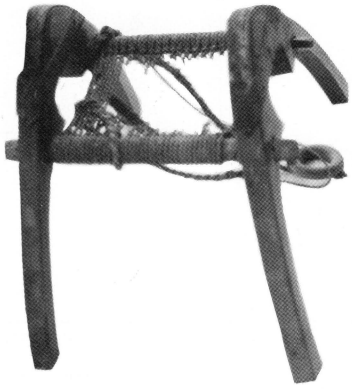
注…畜力スキは豪農のみ使用
話者……岡竹之助（大正2・4・28生）

▶のこがま

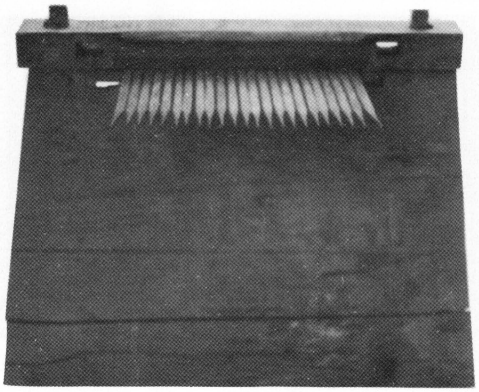


▶すき（牛や馬にひかせる）

◀1、ね刈り鎌　2、野がけ鎌
3、三本まんのう　4、四本まんのう



▶しろかき用くら



▶千歯こき（脱穀用）

◀苗かごとてんびん

(三) 衣

仕事着……肌着（下着）は男はシャツ（丸首、ぼたん付き、木綿で自分の家で縫う）。女はチャンチャンコ（腰までの長さ腰ひもで結ぶ、手縫い）。

▶仕事着…はんてんこ
◀仕事着…はんこももしき

		体上 夏・冬	体下 夏・冬	手	すね 夏・冬	のもきは	かぶりもの
男	田仕事	ハンテン（木綿・縞織）裏地なし ハンテン（木綿・縞織）裏地付き	ハンコ（ももしき）（木綿・紺染め）前後で合せて結ぶようにひも付き		ヨゴ脚絆（木綿・紺染め）	素足	頬かむり（手ぬぐい） スゲ笠 編笠（いぐさ製）
	畑仕事	同上	同上		同上	同上	同上
	山仕事	同上 刺しこ（縞）	同上		同上	草履 ツマゴ	同上
女	田仕事	ハンテン ハンテン	ハンコ（夏…木綿） 赤い腰巻（冬はネール地で軽い作業、忙しい時）	コデ	ヨゴ脚絆	素足	頬かむり スゲ笠 編笠
雨具 暑さよけ		ヒゴモ（いぐさ製）暑さよけにもなる	汗とり用ハダガモ（いぐさ製）肌に直接着る。その上にシャツ				スゲ笠 ナンキン袋（「マタイ」）
防寒具		皮着（裕福な人）鹿皮で袖はテッポウ袖（筒袖）	刺しこどんぶく			ツマゴ（男・女） 豚皮の靴（裕福な男性）	

話者……大内はぎの（明・40・7・16生）

▶きござ

▶ひごも

▶俵あみ具（ひごもなどもあむ）

(四) 食

主食……朝メシ（六時）は麦メシと漬物で配合率は米と麦が半々で麦はマル麦をなべで煮た煮麦を用いた。昼メシ（一二時）は麦メシのお茶漬けと鰯の塩物、夕メシ（一九時）は麦メシとお汁と煮つけと油いためである。田植え稲刈りの時は一〇時に草餅（冬のうちに氷餅を乾燥したもの）を水に漬け、軟らかくして、それにキナコ・砂糖・醤油をつけて焼いた物を「タバコ」としてだす。午後のタバコ（十五時）はキナコおにぎりと煮物（かぼちゃ・じゃがいもの）がでる。米つきや籾ひき（土間でやる）で多忙な夜は二十二時頃、夜食として小豆の煮つぶし（ナベで小豆を煮て、かぼちゃ・さつまいもを入れたもの）を食べる。

保存食

(ア) **塩漬け**

梅ぼし（七月）・すその実（九月）・たくあん（一〇月）・白菜（十一月）

(イ) **みそ漬け**

こんぶ・大根・きうり・ふき。時期は不定である。

(ウ) **乾燥**

わらびを湯がいて、編んだ藁につないで乾燥する。しみ大根。

(エ) **その他**

そばをひいて湯がいて餅にして食べる。あわ餅。

餅・だんご等（特別の日）

(ア) **餅をつく日（月は旧暦）**

お正月用（12月28日）・お十八夜（1月18日）・小正月（2月1日）・節句―草餅（3月3日）・おしゃか様の日（4月8日）・節句（5月5日）・住吉神社の日（6月15日）・お墓詣りの日（9月21日）・毎月の一日と十五日は休み日で餅をつく。

(イ) **赤飯をつくる日**

村氏神（伊去波夜和気命神社―御深山さま）の祭り日（8月1日）・内神（うちがみ）（天照皇大神宮）の祭り日（9月16日）

(ウ) **だんごをつくる日**

春・秋の彼岸・おしゃかさまの死んだ日（2月8日）・お盆（7月13・14・15日）お大師さまの日（11月23日）・事ばらいの日（12月8日…家族の数だけ作って木にはさんで「カラス、カラス」と呼んで烏に食べさせる）

(エ) **しとぎを作る日**

内神（天照皇大神宮）のお祭り日（9月16日…米粉をねって手で握った形につくり六個あげる）。

(オ) **おはぎを作る日**

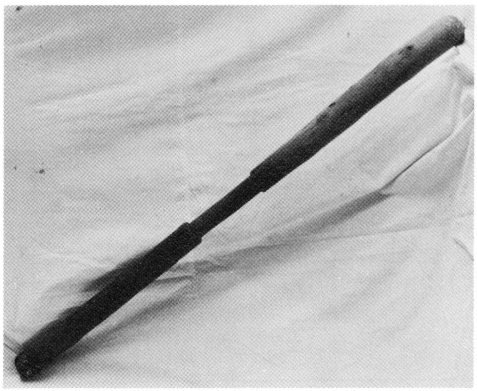
お地蔵さん日（8月24日）・えびすこの日（10月20日）。

(カ) **その他**

七のか（な）日（7月7日には墓掃除の日、うどんを作る）・煤はらいの日（12月18日―小豆御飯）。

飲食用具

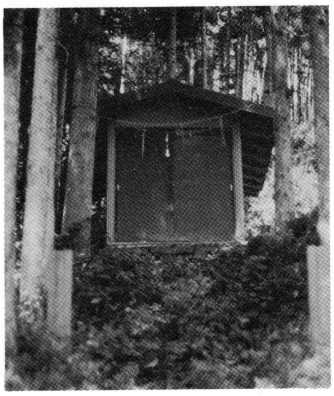
（次ページ上段参照）



▶千本杵（みそ作り用）

(五) 住

（次ページ下段参照）



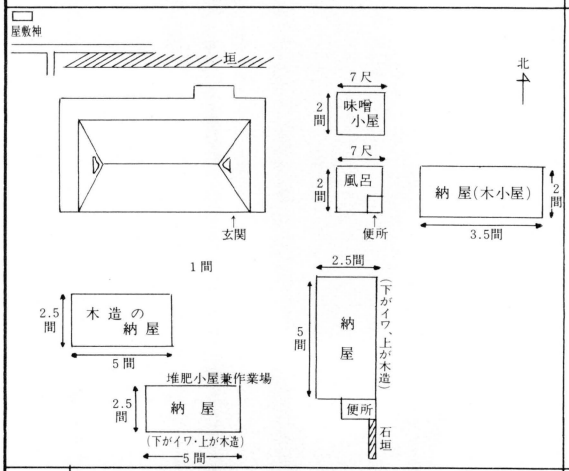
▶馬場信雄氏の屋敷神（稲荷神社）

	形状	用途	材質	称名
臼	餅つき用	米・麦をつく（脱穀）	けやき	ウス
臼		大麦・大豆をひいて粉にする	石材	ヒキウス
杵	餅つき用	米・麦つき用（細い）（太い）	けやき・かし・梅	キネ
杵	みそ作り		同上	千本ギネ

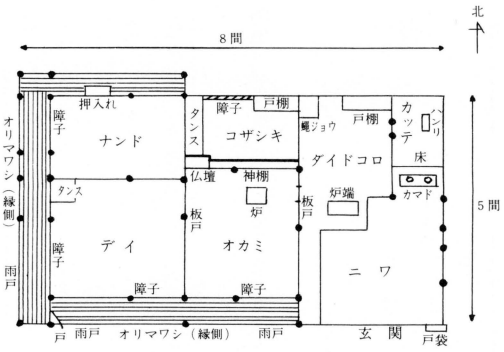
	称名	材質	手入地
鍋・釜	鉄ナベ 鉄ガマ	鉄	不明
飯わん	茶ワン	石巻せと物・黒ぬりの木（黒ぬりの木は不明）	
汁わん	オツユワン	桑の木	カマサキ鳴子
膳 平常	ネコ足 ゼン	内側—赤のうるし 外側—黒のうるし 材質は不明	不明
膳 晴（ハレ）のとき	高足 ゼン	杉 合せ目は桜の皮	不明
弁当入れ	マゲワッパ メンパ	杉 合せ目は桜の皮	不明

話者……亀山やその（明35・10・12生）

屋敷内配置図（門・垣・屋敷林・井戸・屋敷神なども記入）



母屋間取図（部屋名・広さ・いろり・床なども記入）



概要	母屋…寄せ棟、屋根材はカヤ（青年会のカヤ野のカヤでまに合った）、裏の方に板屋根で一間のゲヤをおろしている。 屋敷神（ウズ神）は稲荷神社で裏の屋敷内の小高い場所にあり、祭礼は9月10日・9月9日の朝、馬場カメイ（同族）の七軒で草刈り、周囲の掃除をし、夜はよごもりする。
変遷	ニワ…土間で、昭和40年頃コンクリートにした。縄ない、コモ編み、炭スゴ編み、餅つき、味噌煮、その他簡単な作業をした。 ダイドコロ…炉端、赤土のカマド、釜立て柱に釜の神が祀ってある。 オカミ…客間、客の寝間、顧い人の寝間に用いた デイ…主人夫婦の寝間 養蚕の棚あり。 コザシキ…子供の寝間　ナンド…若夫婦の部屋、産室、子どもの寝間。カツラ…炊事室
その他	●炉ばたには自在鈎（「カギ」）…竹製。上にはワラ製のベンケイをつるし魚などを串にさし干す。また干しカゴ（魚）をつるした。 ●カナワを「ロマワリ」「ロマワシ」と称した。 ●かまどは「クド」と称し、赤土製であったが大正末頃から松島イワにした。 ●灯火具は大正末までランプ、神棚にはなたね油を用いる。

炉ばた（ふんごみ火戸）

話者…馬場信雄（明41.3.18生）

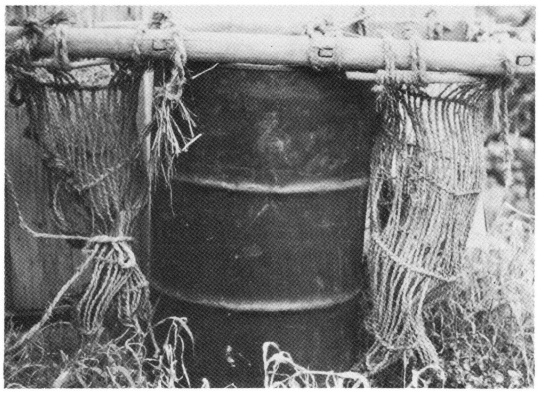
◀竈の神（岡東平氏提供）

（岡田博門氏）　（片岡伸行氏）　（岡田市子氏）　（亀山庄平氏）

(六) 運輸・交易

運搬具……肩負い運搬具は「テンビン棒」で水桶・こやし桶を運搬した。背負い具としてはタンガラ（堆肥の運搬）・バンドウ・ヤセウマ（薪や木を背負って運搬）。畜力運搬具はタレパカマ（主として堆肥・土などの運搬に用いる）。人力としてはテモッコ（ワラ三尺四方の角形をし堆肥を運搬）。車は大八車（稲、主として重いもの）荷車は稲とかの農作物を運搬する。

▶たれぱかま



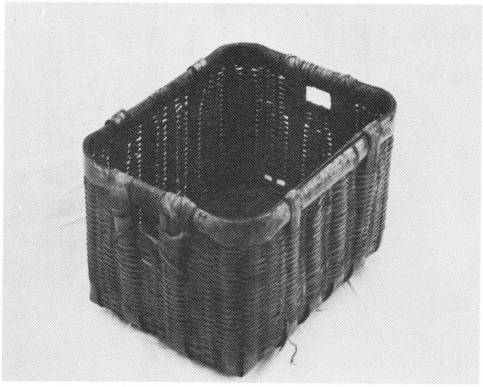
◀ばんどう

◀たんがら

行商

他地区から来る者	来る時期	運搬具
渡波（魚屋）	毎日	テンビン棒 カゴ 箱
石巻（酒屋・石川屋）	注文をとって	荷車・樽 一升トックリ 二升トックリ（大正末から）
十三浜・雄勝・女川	海草…のり（秋～冬） 海草…ひじき・ふのり（春～夏）	脊負いっコ

話者…亀山庄平（明38・4・24生）



◀御用かご

飾りつけ……年寄りは午前中に風呂に入って身を清める。ナカノ間の神棚に五・七・三の注連縄をはる。歳徳神には三蓋の松をかざり、台所の釜の神・井戸・便所・納屋・機械類にはコドシ縄をはる。

臼伏せ……臼の年とり。庭か納屋に臼を伏せ、その中に一升ますに供え餅とともぎ米を入れる。臼の周囲に注連縄をはる。

年とり食事……米の御飯・さしみ・納豆・くずかけ（こんにゃく・魚・竹のこ・しいたけ）をお正月さまにあげ、それと同じ食事を家族一同で食べる。夜は遅くまで起きている。

年中行事（月は旧暦である）

(一) 正月の用意

煤払い……一二月二三日、神棚を掃除し、天井や梁の煤をおとし、畳を外してたたく。

町たし……一二月二三日～二八日

餅つき……二八日、朝二時頃から午前中かかって四斗位の餅をつく。山からエノミの枝を伐ってきて、それに餅をつけメェーダマ木をつくる。また山から伐ってきた栗の枝にだんな殿（主人）の年の数だけの餅をつける。これを庭メェーダマと言って正月庭にかざる。

(二) 年とり

松迎え……朝早く山に行って三蓋の松の枝一本伐ってくる。

(三) 正月

元朝詣り

若水くみ……伏せた臼の上に置いた若水桶に元日の早朝、年男が井戸から水を汲む。それで雑煮をつくる。

買いそめ……二日、石巻に行って買いそめをする。

▲正月獅子振の獅子頭

獅子振り……二日、青年会の人々が各戸をまわる。

臼おこし……四日、伏せた臼をおこす。一升ますの中に入れた供え餅にとぎ米が沢山つけば、その年は作がらが良く、つかぬ時は作が悪い。そのとぎ米で小豆粥をつくる。

年始まわり……四日。

ごがんにち……五日。

若木迎え……六日、山におはねとコドシ縄を持っていき、ならの木にあげて拝み、一本伐ってくる。その木を小さく切って乾燥させておく。（一四日、アカツキ粥をつくる時の薪にする）

七草粥……七日、小豆と七草（せり・冬菜・青物）を入れた粥をつくり、家族で食べる。

厄　日……八日。

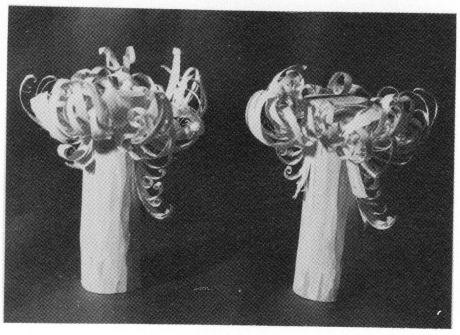
農はだち……一〇日、五月田植えの苗を丸める縄や馬の手綱・荷つけ綱をなう。

作はだち……一一日、朝起きるとすぐ歳徳神に立てた三蓋の松を苗代に持って行って刺し、三鍬堀って拝む。

山のきりそめ……一二日、山へ行って木を伐るまねをする。帰ってきたら、山の神の日と言って御馳走を食べる。

お日待……一二日、講中毎戸からおわんで一ぱいの米で御飯をたき、皆で全部食べる。また屋敷神古峯神社に参拝し、火災よけの祈願をする。

ハナミ木……一三日の夕方、山に行ってカツノ木を伐り、ハナミ木（けずりかけ）を作って、神棚に三本・釜の神に一本・歳徳神に一本あげる。

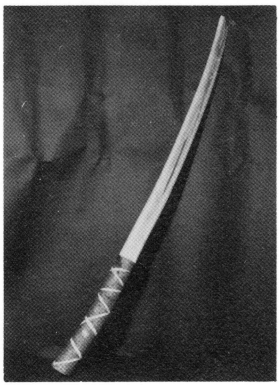


◀はなみ木（はろみ木）

カセドリ・正月おさめ……一四日朝、雑煮を食べて休む。夕方、子供たちが「カセ鳥ケッケ、餅ケロケッケ」と唱えながら各家の戸口に立ち、切り餅をもらって歩く。それをアカツキ粥に入れ、お正月さまにあげて拝み、家族で食べる。その後、注連縄を全部はずしておろし、屋敷神の境内に納める。

長虫払い……一五日、前の晩に食べた茶碗などをそのままにし、朝に洗い、その洗い水をハシリに捨てないで、家の周囲にふりまく。（長虫が家の中に入らないようにと）

鳥追い……一六日、早朝、竿の先に正月の御弊を結び、子供たちが「ヤホーヤホー」と叫びながらハナミ木のあまり木（長さ一尺五寸）で叩き、カラスを追い払う。



◀成木責の刀

注……水沼字天似一四一の片岡伸行氏の家では、ハナミ木の余り木を刀状に削り、それで柿の木を「ナルカ・ナラヌカ」と一人が唱えながら叩き、もう一が「ナリマス・ナリマス」と答えて成り木責めを行う。

仏の日……一六日、小豆御飯と油あげのまぜ物を食べ、お墓詣りをし、お寺へ御年始に行く。この日は休み日。

蔦の年とり（小正月の晦日）……三一日、夕方山へ行って蔦ウルシをとってきて歳徳神にあげ、餅をつく。

(四)　二　月

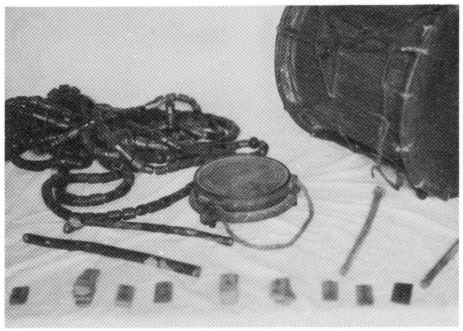
蔦の正月（小正月）……一日～三日

百万遍……八日、各講中から一人ずつ団子をもって宿前に集まり、仏前に供え大きな数珠を数百回も廻し、「ナムアミダブツ、ナミアムダブツ」と唱えながら祈禱する。

初午の日……お茶を飲まない。

(五)　三　月

節　供……三日、餅をついて食べ、休む。



◀百万遍で使用する道具

▶青年会総会の時おがむ秋葉山と山の神

ヤコメ……苗代に種まきした後、種つけの種の一部分（一升か二升）をスリバチですり米にし、鉄なべで炒って臼でつき、折った白い紙に包み、それを青竹の先にはさんで田に立てる。子供に食べさせる。

秋葉山……一五日…青年会の総会。秋葉山・山の神の碑を拝み、宿前で総会をもち、一年の山の行事をとりきめ、後、懇親会。

彼　岸……一八日～二四日。

観音講……二四日、宿前に集合して観音様のお掛図を拝み、冠婚葬祭の料理、行儀作法を年寄りから習い、その後懇親会。無断で欠席できない。

(六)　四月・五月

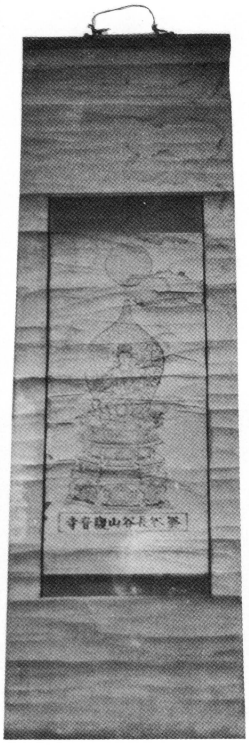
お釈迦さまの日……四月八日、団子をつくり、仏前に供える。

節　供……五月五日、餅をついて休む。

ソオリ……田植えの始まる日、お田の神をまつる。赤飯のおにぎりをつくり、苗三把にそれぞれ一つずつのせ、庭にかざり拝む。このおにぎりを食べると腰が痛くならない。

サナブリ……田植えの終った夕方、餅をついて神・仏にあげて拝み、皆で食べるという。

注……サ（ソ）オリは、サ（ソ）とよばれる田の神が降りてくる初田植えの行事。サナブリはサノボリの転訛で、田の神が田植え終わりを見とどけて天へ帰る日からきたと言われ田植えの無事終了を感謝する、稲作儀礼――『日本民俗資料事典』（第一法規出版刊）



▶観音講の掛図（大悲正観世音像）

(七) 七　月

ナノカ日……七日、墓掃除、井戸替え。

七　夕……七日の夕方、子供たちがお稲荷さん（屋敷神）の境内に集まって舞台を造り、七夕さまをかざりつけ、とうみぎ・野菜を供え、舞台の上でランプカンを叩き、唱歌を歌って一晩さわぐ。かやをつってみんなで泊る。次の日の朝、太鼓やランプカンを叩きながら、下流の水沼川へ行って供え物を流し、七夕送りをする。

盆棚かざり……一三日、組立式、花は自分の家で植えたものをあげる。

燈籠柱……一三日、新仏と年忌に庭に立てる。

迎え火……一三日の夕、麦からで作ったタイマツに火をつけて、庭で迎え火をもやす。

▶盆　棚

お墓詣り……一四日、亀山カメ（同族の人々）でお墓詣りをする。

盆　礼……一五日、他の家々の仏を拝む。

盆送り……一六日、夕方、麦殻でつくったタイマツをもって、供え物を盆ごもに包んでお寺（龍泉院）の下の送り場へもって行き、燃やす。

二〇日盆……二〇日、燈籠柱をとりはずす。

送り盆……三〇日、盆礼で行きかねた家の仏さまを拝む。

(八) 八　月

村氏神（伊去波夜和気命神社……御深山さま）の祭……一日、前の晩は夜ごもり、祭り日は赤飯をたき、村氏神へもって行き、参拝する。

おめ月さま……一五日、青年会で祀っている八幡神社の祭り、前の晩は前夜祭。

地蔵祭り……二四日、お寺の地蔵尊のお祭り、前の晩は夜ごもり。朝おはぎを作りあげる。

◀地蔵祭りの地蔵

(九) 九月・十月

節　供……九月九日。

お稲荷さんの祭り……九月一六日、屋敷神の祭り。亀山カメで参拝。

刈上げの朔日……一〇月一日、餅をついて神棚にあげる。

秋葉山……一〇月一五日、青年会総会。

二〇日えびす講……二〇日。

観音講……二四日。

(十) 十一月・十二月

御大師さん……十一月二三日、ハギの木で長い箸を作って、それで小豆粥に餅を入れ、十二人の子供に食べさせる。

ミズコボシの朔日……一二月一日、炉の四隅に、豆殻に豆腐をさして立て、水を豆腐にかける。その豆腐をお汁に入れ子供たちに食べさせる。タヅクリ（ゴマメ）を、玄関の入口や雨戸の入口に数匹ずつはさむ。

事ばらい……十二月八日、家族の数だけの団子を作って木にはさみ、地蔵さんのある所までもって行き、「カラス、カラス」と呼んでカラスに食べさせる。

話者……亀山甚四郎（明治41・12・26生）

昭和53年度民具収集調査（稲井水沼東沢地区）

① 調　査　日……7月23日・24日　　調査者　鈴木東行（市文化財保護委員）
岡田　寛（石巻工業高校教諭）

調査補助員　木村浩之（石巻工業高校人文科学部員）
阿部達也（　〃　〃　）

② 収　集　日……10月26日　　収集者　鈴木東行
庄司恵一（市教委文化係）

③ 収集民具

項目	品名	計
衣	はんてんこ（3）　はんこももしき　ももしき　ちゃんちゃんこ　子供用着物（2）　改良作業衣　作業衣（2…上・下）　すげがさ　ひごも　きござ　火のし	15
染・織	ざんぐり（糸とり機）　さんご　ひ	3
食	たかぜん　しってこ（汁器）　釜台　千本杵（餅つき用）　千本杵（みそ製造用）	5
住	火鉢　ろまわり　かぎ（自在鈎）	3
生産(農)	しろかき機（2）　手押ししろかき機　しろかき用くら　除草機　稲刈り機　もみどうし　まんごく　俵あみ具　わらきり　消毒器	11
運搬・通信	ばんどう　たんがら　手もっこ　たれぱかま　馬のにぐら（2…馬車用と一般運搬用）　拍子木	7
社会生活	消火用ポンプ（大正3年頃使用）　ポンプ入れ	2
人の一生	えじこ	1
信仰	はなみぎ（はろみぎ）　成木責（なるきぜめ）	2
総計		49

鋳銭場資料『金局公用誌』について

石巻市文化財保護委員　石垣　宏

一、発見の契機

昭和五十三年十一月、仙台郷土研究会常任理事逸見英夫氏（事務局・仙台市二日町）より連絡があり、鋳銭場関連資料発見とのことであった。所有者は京都市の古書店主畠山慶雄氏（雄勝町出身）とのことで、逸見氏が京都の大学の同窓会出席の折、畠山氏と逸見氏は同窓生で会った際に資料を紹介された。私も仙台郷土研究会の理事で逸見氏には日頃ご指導をいただいていることでこの資料の情報がもたらされた次第である。

二、購入までの経過

鋳銭場資料としても内容が把握できないため、市教委社会教育課にお願いして昭和五十四年二月、元市図書館長・現市史編纂室の橋本晶氏と共に京都に行かせていただき、畠山氏のご好意により資料全部の目録と一部写真撮影をさせていただいた。資料は後述の目録のように、全国におかれた銭座を幕府の金座役人が視察した時の記録で、石巻鋳銭場関係は勿論、幕府直営の難波の銭座、水戸領内の銭座資料及び鋳銭場絵図面があり、石巻鋳銭場とその関連、比較研究のできる貴重な資料と判明し、市教委へ購入方を願い出た。価格は百五十万円でもあり、石巻市としても史資料購入の前例がなく心配されたが、青木市長はじめ市当局、浜田教育長、千葉社会教育課長のご理解で補正予算をつけていただき購入することが決定された。さらに所有者である畠山氏は売る意志はなかったのであるが、地元のためになるならとご理解いただき、十一月社会教育課文化係長本田氏と共に京都に赴き、古文書を購入して来たわけである。

三、石巻鋳銭場について

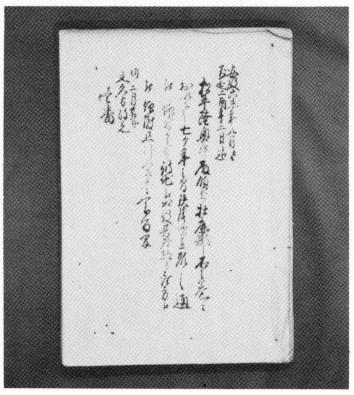
江戸時代の貨幣鋳造は、幕府の独占となり、金座・銀座・銭座が設置されて行なわれた。銅銭は寛永通宝であるが、この寛永通宝は、最初に寛永三（一六二六）年水戸で作られたが、のち寛永十三年、江戸・近江坂本の二か所の銭座で本格的に鋳造され、翌年から水戸・仙台・三河・吉田・信濃松本・越後高田・長門萩・備前岡山・豊後竹田の八か所に銭座が増設された。この仙台での鋳銭の場所は栗原郡三迫とされているが場所は不明である。これは寛永十五年に中止となったが、この例にならって享保年間藩主吉村公は藩財政逼迫の対策として幕府へ鋳銭の許可願を提出、享保十一（一七二六）年に許可され、場所は牡鹿郡石巻に決まった。石巻に指定した理由として、東北大学所蔵の「記鋳銭場工図後」に

享保十二年丁未今之大君吉村朝臣以寛永之前蹤申請之江戸官司蒙許命於是命其奉行及諸有司択水木薪炭運漕凡宜事之処新営構其場区於牡鹿郡石巻邑以鋳銭

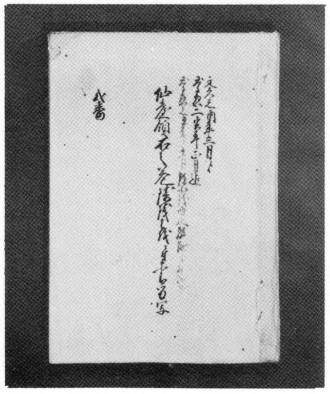
とあり、河港なので燃料・原鉱・製品の運送上便利である点からと見られる。

▲『金局公用誌』

このちの断続的に安永七年まで石巻で寛永通宝の銅銭が鋳造された。天明四年前年の飢饉による窮民救済・藩財政難打開のため幕府の許可を得て、仙台領内通用の「仙台通宝」（撫角銭・角銭）の鉄銭を鋳造し始めた。この銭は寛永通宝に比べると質量ともに劣ったため貨幣価値が下落し、同八年に中止している。このちち天保・安政・慶応と断続的に銭鋳造が行なわれ明治維新をむかえている。



◀仙台領石之巻鋳銭関係文書

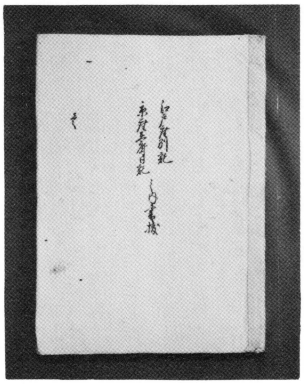


◀同右

◀同右

鋳銭場に関しては、石巻市史一巻に記載され、古文書・絵図類・現物資料は毛利コレクションに所蔵されている。

金局公用誌は、全部で六十六点、後述の目録の通りであるが、これは幕府の金座役人奥田昌芳が明治初期に、幕府の銭座に関する史料をまとめたもので、石巻鋳銭場は勿論、幕府直営の難波銭座に関してもあり、特に難波で百文銭が鋳造されたことの資料が多く見られるが、幕府と各銭座のつながりが判明できよう。外に天保年間以降の石巻鋳銭場と他領内の鋳銭場とも比較できる好資料といえる。



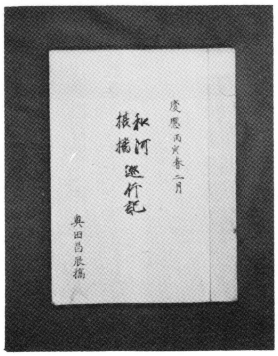
▶別記書抜　壱

◀浪華鋳銭御用出役日記　壹

四、資料の活用

金局公用誌、全六十六点は全部解読し文化財だよりなどを通じて紹介していきたいと思っている。本資料については、今後解読して一括資料集のような形で紹介したいと思っている。

最後に、今回の「金局公用誌」の購入についてご理解いただいた青木市長・浜田教育長・千葉社会教育課長ならびに市関係当局に厚くお礼を申しあげたいと思います。



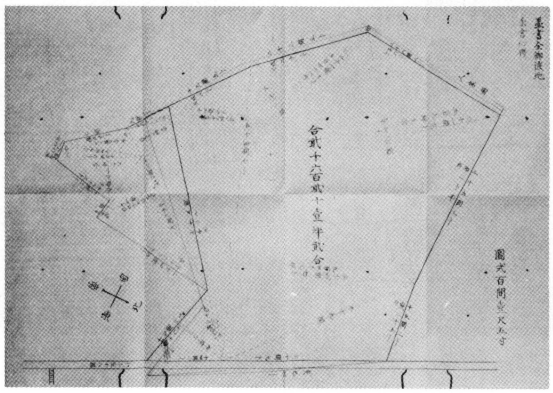
▶和河摂播　巡行記

◀御用先觸

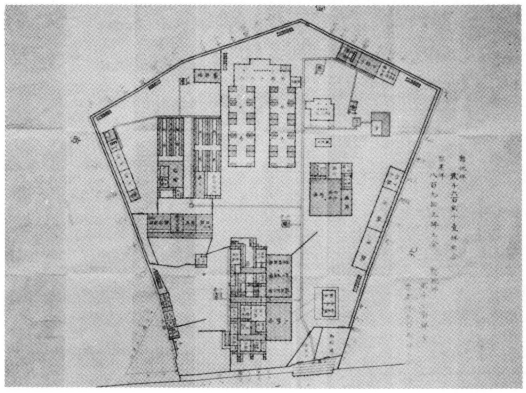
『金局公用誌』（全66点）目録

1、出張所御取建　御普請御入用取調書
2、諸品買入直段書
3、鋳銭吹立道具幷ニ諸場所奉公増仕事手続控帳
4、百文銭方諸場所仕業増銀
5、下鉢方手続書　一面
6、百文銭鋳立方手続
7、百文銭鋳放出来帳
8、出入町人住所名前書
9、浪華直銭局要記附録
10、年中行事
11、摂播巡行記
12、於深川　鉄吹方道具代付
13、手代棟梁職人　上坂手当並賃銀取調書
14、在坂日記
15、浪華　御城出入鑑札写　直銭局印紙
16、大吹所道具
17、御用先触　奥田真太郎
18、摂州難波村　鋳銭御場所御渡地図
19、摂州難波村　絵図面
20、巴　調
21、（日　記）
22、（人　名）
23、（書　状）
24、覚
25、（書　状）
26、上京日記　抜
27、江　大　両銭局便覧
28、通
29、百文銭吹方　鋳銭座絵図面
30、百文銭方　正減取調

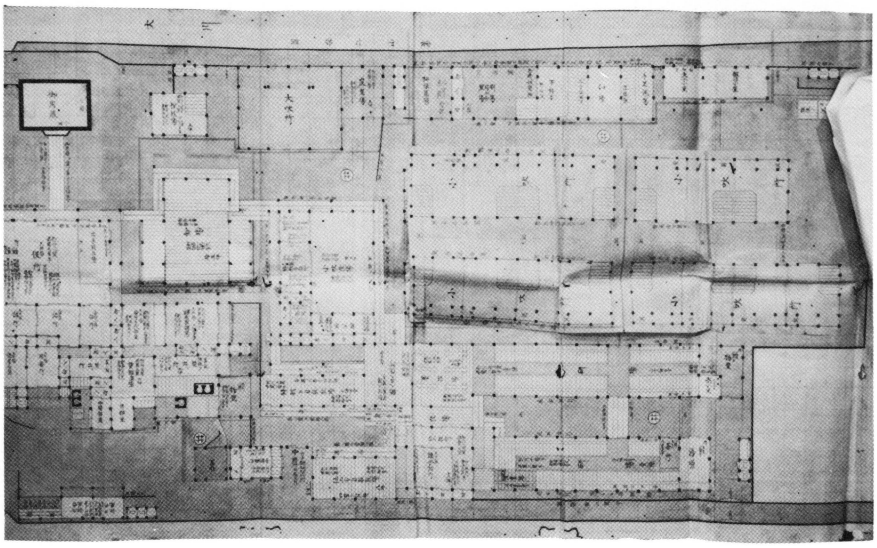
31、ケ條申上候　書付
32、鋳銭座ニ而泉ノ字相用候右書付
33、大坂表百文銭吹方一件書留之内書抜
34、諸　方
35、鋳放銭出来銭改場幷詰所向賃銀渡場禁出し所其外共新規御建方仕様帳
36、覚
37、浪華鋳銭御用出役日記　弐壱
38、同
39、和河
　撰播　巡行記
40、百文銭勘定書
41、百文銭出来高書
42、（書　状）
43、百文銭方日之勘定帳幷月一勘定書
44、銅四文銭吹方別記書抜
45、明和度　鋳銭御達書（水戸領内ニ而鋳銭吹方）
46、御伺書
47、百文銭出来吹減勘定
48、百文銭方入用調
49、百文銭方諸入用割合幷種銭万取扱其外共御掛り御勘定方ゟ座方年寄勘定役江
　直之御尋ニ付書面を以申上候写
50、百文銭吹方凡手続
51、仙台鋳銭一件（天保八）
52、鋳銭方伝達覚書（明和五）
53、松平陸奥守殿領分牡鹿郡石之巻ニおいて七ヶ年之間鉄銭吹立願之通被仰付候ニ付彼地
　江出役其外都而座方江被仰付見引合等書留写（安政六～萬延二）
54、仙台領石之巻鋳銭ノ儀ニ付書留写　（文久一～慶応二）
55、別記書抜（安政二）
56、〃　（安政三）
57、〃　（安政四）
58、〃　（安政五）
59、〃　（嘉永七）
60、〃　（天保六～嘉永三）
61、〃　（嘉永五～六）
62、別記書抜（弘化二～嘉永三）
63、〃　（嘉永四～五）
64、（百文銭吹方入用手当金）
65、江戸座別記・京座在府日記之内書抜
66、別記書抜



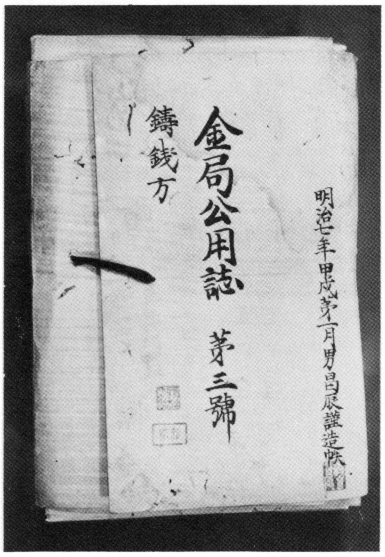
▶難波村鋳銭御場所御渡地図

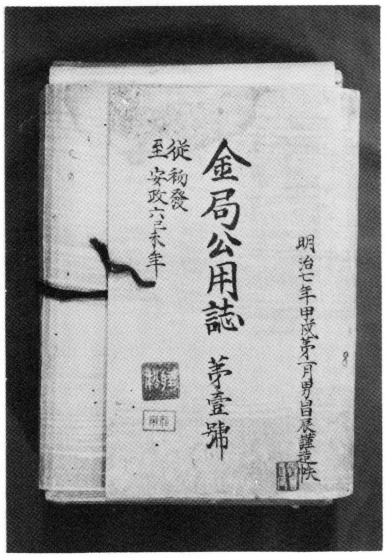


▶同　上



▲百文銭吹方　鋳銭座絵図面（部分）





石巻市文化財だより

昭和54年度文化財調査特集

昭和55年３月31日印刷
昭和55年３月31日発行

発行　石巻市教育委員会
石巻市日和ヶ丘一丁目１番１号

監修　石巻市文化財保護委員会

印刷　株式会社松弘堂
石巻市門脇字本草園２－１６
☎（0225）㊱５５５５㈹